

## 旧帝国ホテルの解体から移築に関する研究(その1)

—早稲田大学明石信道研究室による解体時調査について—

旧帝国ホテル	博物館明治村	様式保存
明石信道	実測図面	解体時記録

正会員	○豊島 麻由佳 *
正会員	本橋 仁 **
正会員	大内田 史郎 ***
正会員	渡邊 舞 ****
正会員	中川 武 *****

## 0. 研究目的と研究対象

フランク・ロイド・ライト(1867-1959)設計の旧帝国ホテル(1923-1986)の解体に際して、明石信道(1901-1986)(以下、明石)によっておこなわれた実測調査とその記録資料について報告をおこなう。なお、本報告は、現在早稲田大学と工学院大学との共同研究<sup>1</sup>により進めている「様式保存」に関する一連の研究に関連しておこなう。

## 0.1. 研究目的

本研究は、旧帝国ホテルの解体移築時の調査を通して、「様式保存」の検証を行うことが目的である。この「様式保存」とは、博物館明治村の初代館長でもある谷口吉郎氏(1904-1979)により提唱された保存理念である<sup>2</sup>。旧帝国ホテル中央玄関の移築に際し用いられたものとして知られているが、いかなる具体的方法が実践されたのかについては、省みられてこなかった。本研究は、この「様式保存」の解明を、実例をもって、その時代的背景とともに考察を行うことで、日本における近代建築の保存理念の特異性を明らかにしようとするものである。

## 0.2. 旧帝国ホテル概要

旧帝国ホテルは、周知の通り、1923年アメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトによって建てられた。客室の少なさや、老朽化の問題などから1967年に取り壊しが発表され、同年12月より取り壊しが開始した。解体直前に明治村への移築が決定し、現在は中央玄関のみ博物館明治村に残されている。

## 1. 本報告の対象「明石信道資料」について

本研究は、旧帝国ホテルの解体時・移築時の双方を調査対象とし進めている。本報告(※)では、おもに2015年度に調査を実施した解体時資料のひとつである、「明石信道資料」について報告をおこなう。同資料は、1967年から一年間かけて早稲田大学明石信道研究室により行われた一連の調査記録である。13ヶ月の実測と30ヶ月の研究期間を経て行われた調査の成果は『旧帝国ホテルの実証的研究』(東光堂,1972)としてまとめられた(図1)。この過程で作成された図面、調査時に撮影された写真が、現在早稲田大学中央図書館特別資料室に保管されている(図2)。旧帝国ホテルの解体時の様子を復原するにあたって、同資料の調査・分析を実施した。

## 2. 「明石信道資料」概要

明石信道資料は、現在早稲田大学中央図書館に保存・管理されている図面と写真を含む一群の資料である。同資料は、明石家より早稲田大学に寄贈されたものである。現在同資料は一般には非公開であるが、本研究に際して資料情報の整理及びデジタル化を進めている。

## 2.1. 寄贈の経緯

寄贈に至る経緯は、2001年に行われた、早稲田大学建築学科の校友会である稲門建築会50周年と、明石信道生誕100周年の記念事業の企画を契機とする。同会の調査により資料がはじめて確認され、修補等が施された<sup>3</sup>。その後、展覧会「建築に挑む図面表現の美」<sup>4</sup>がおこなわれ、同図書館へ2002年に寄贈された。以下に、明石信道資料のうちの図面・写真の概略を記す。

## 2.2. 実測図面

現在図書館作成のリストで確認できる図面は全46枚(内、35枚が修補済)。サイズは、大きいもので、3,043mm×775mmと、非常に大きい図面を含む。これらの図面は全て、前述の『旧帝国ホテルの実証的研究』に掲載されている原図である。現在、修復済みの図面はポリエステルフィルムに封入され同図書館に保存されている(図3)。なお、保存修復等の処置がなされていない図面が一部残されており、これについては今後、調査を進める予定である。

## 2.3. 記録写真

写真は、「村井修氏撮影 帝国ホテルライト館写真」と書かれた箱3つにまとめられ、保存されている。各箱に、一部アルバム化された写真(図4,5)、ネガが収められている。すべての写真が「村井修氏」によるものかについては、検討の余地を残す。それは、明石氏の日記<sup>5</sup>に当時の写真記録は、村井修<sup>6</sup>に加え、実測者や途中から協力者として参加したホテル専属の写真家によって行われたという記述があるからである。具体的に、ベタ焼き<sup>7</sup>のアルバムの中にはハーフサイズで撮られたものが見られた。これは、日記において、「実測図に有効なりし島の撮影したフィルム、半サイズなれど504枚」の記述との親和性を持つ事実である。今後、村井氏以外の撮影による資料も含まれている可能性を視野にいれ検討を行う必要がある。なお、今年度はアルバム資料のデジタル化を行った<sup>8</sup>。

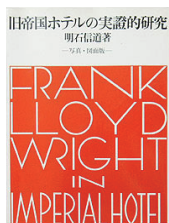


図1 『帝国ホテルの実証的研究』



図2 早稲田所蔵資料



図3 早稲田所蔵実測図面



図4 早稲田所蔵アルバム

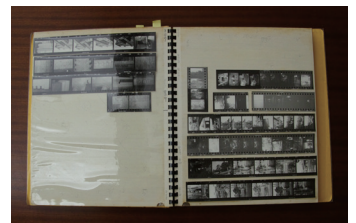


図5 早稲田所蔵アルバム / ベタ焼き

### 3. 明石信道研究室による調査

明石は、当時の保存運動とは全く独立して、同調査を実施した。ここで、調査背景をおうことで、明石信道資料の性格について分析を加える。明石は、前述の『旧帝国ホテルの実証的研究』に、調査時の日記を取録している<sup>9</sup>。同日記は、調査の動向を追うことのできる資料であるとともに、彼の調査動機を知ることでできる貴重な記録である。以下に同日記をもとに、調査動機、作業体制、また同時期に活動をおこなっていた「帝国ホテルを守る会」（以下、「守る会」）との関係について述べる。

#### 3.1. 調査の動機

明石は、次のように調査の契機を記している。

「数回パーティに招待される度毎、処々方々が壊れ、壊れ方は増してきたように感じられた。(中略)私の心は穏やかでなかった。今のうちなら、調査して、写真や図面やスケッチを一枚でも多く残しておくことが出来る。理解したい欲求は、だんだん嵩じて、図面に残したいという具体化を希う心の変化そのまま、私の動機のあらましで、この企画が心に浮んだのは、昭和42年の正月であった。」<sup>10</sup>

このように、彼にとっての旧帝国ホテルの調査は、フランク・ロイド・ライトの建築理解のためにあり、保存運動とは無関係に、その調査を開始している。このような経緯より、その後、後述する「守る会」による保存運動が展開されていく中、彼はその活動に加わることなく、独自の目的意識をもって調査を行っていくこととなる。

また、これには、日頃から親しい関係<sup>11</sup>にあった内藤多仲氏(1886-1970)からの影響がみられる。内藤は当時、旧帝国ホテルの保存に関する意見を、明石宛に手紙で語っている<sup>12</sup>。また、明石も後年おこなわれた帝国ホテル移築委員会準備会のなかで、以下のように内藤に伝えられたことを明かしている。

「今、書きとめたほうが良いと、アドバイスされた。金がかかるだろうから、応接もすると。」<sup>13</sup>

#### 3.2. 調査・作業体制

この調査は、早稲田大学明石信道研究室により行われた。以下がその概要である。

実測調査開始 1967年8月

解体工事開始 1967年12月

実測調査終了 1968年2月(帝国ホテル解体終了)

実測図面完成 1972年8月

調査作業者：[実測] 学生14名 [構造] 内藤多仲博士・古藤田喜久雄教授・早大理工学研究所 [材料] 田村恭教授・神山幸弘教授・同研究室員 [図面作成清書] 羽石邦夫・大蔵諒一 [写真撮影] 村井修・谷研究室 福田・明石信道・島義人・ホテル専属の写真家

#### 3.3. 保存運動との関係について

周知の通り、旧帝国ホテルの保存問題は、おおきく世論

を賑わした話題であった。しかし、明石研究室の調査と、ほぼ同時進行していた「守る会」との活動に、日記からは特に連絡・影響関係が認められない。明石自身は、元来旧帝国ホテルの魅力が調査動機でもあるため「守る会」の保存の意見に関しては一定の理解も示していた。しかし、会の唱えていた「現地保存」は時間的に困難であること、また彼らが具体的な解決案を持たないこと、の二点において無理を感じていたと同日記でも述べている。以上のように、明石は内藤という知己からの意見をふまえ、現実的な側面から、以下のように一貫したスタンスを保った。

「建築家として出来ることは、文献的の意味もあるが、写真か、図面を可及的に記録として遺すことだ。それ以外に方法はない。」<sup>14</sup>

それは、残された記録資料からも、構図の決まった写真のみならず、様々な角度から、細部装飾を撮影するなどといった、記録活動への徹底した姿勢としてみてとれる。

#### 4. 旧帝国ホテル資料における明石信道資料の評価

博物館明治村にも、移築工事に際して記録された、解体時の記録が存在する。博物館明治村には、移築工事に携わった当時の関係者らが、自ら赴いて記録した資料などが、残されている。移築図面の作成にあたっては、明石研究室が記録した図面も参照しながら行われたことが、『帝国ホテル中央玄関復原記』<sup>15</sup>によって明らかとなった。実際には、実測図面をもとに、博物館明治村独自の实測による補足と調整によって移築図面が制作されていた。しかし、明石信道資料の重要な点は、記録の対象が移築部の中央玄関のみならず、全体に及んでいる点である。これは、明石が先述のとおり、あくまでもライトの思想を理解するための記録として、徹底的な記録に望んだ結果であることは言うまでもない。明石信道資料は、現状中央玄関のみの移築にとどまった旧帝国ホテルの、全体像をいま振り返ることのできる貴重な資料である。

#### 5. まとめ

以上の通り、明石信道資料の概要調査をおこなうとともに、その価値評価をおこなった。とくに、日記をもとに当時明石がおこなった調査の背景や、調査動機、さらに保存運動との関係を明らかにした。本年度の調査は、あくまでも概要調査であり、今後調査当時の記録と残存資料との照合を更に進めることで、個々の資料の分析をすすめたい。※本稿は早稲田大学特定課題研究助成費(課題番号2015B-230)による研究成果の一部である。

【註】 1. 工学院大学准教授大内史郎並びに同研究室学生、早稲田大学建築学科助手本橋仁と中谷礼仁研究室学生で研究を行っている。 2. 帝国ホテル移築復原に際し、谷口吉郎は再建の方針の一つとして「外観は様式保存とする」と掲げた。 3. 2001,2002年と有限会社 紙資料修復工房により全35点の実測図面保存修復処置を行った。 4. 現在の帝国ホテル中央玄関のロビーにおいて2001年5月26日から6月10日に展示された。 5. 調査の様子を書き留められている。『旧帝国ホテルの実証的研究』第七章 調査方法と経過(p.409~418)に掲載。 6. 1928. 写真家。『旧帝国ホテルの実証的研究』に取られている写真は村井による撮影。 7. 写真フィルムを印画紙に密着させて原寸プリントしたもの。 8. なお、2015年度は、アルバムとしてまとめられている資料のデジタル化及びその分析を行った。デジタル化を行ったアルバムは全21冊、そのうち18冊が項目別でまとめられた写真アルバム、3冊がネガのベタ焼きのアルバムであった。 9. 『旧帝国ホテルの実証的研究』第七章 調査方法と経過(p.409~418)に掲載。 10. 9. 日記より 11. 明石信道は設計したほぼ全ての作品で、内藤多仲に構造設計の依頼をおこなっている。また、内藤の依頼で山梨県の県民会館の設計も行っているなど、日頃から親しい関係にあった。 12. 内藤多仲「結論的にいえば保存は到底不可能で残念乍ら自然の運命に任す外ないと思います。保存を技術的に考えて、その体質の現状、脆弱なるを救い様がないと思います。」9. 日記より 13. 西尾雅敏『帝国ホテル中央玄関復原記』掲載。巻末記録「帝国ホテル移築委員会準備会 会談記録」より 14. 9. 日記より 15. 西尾雅敏『帝国ホテル中央玄関復原記』(博物館明治村、2010) 旧帝国ホテル中央玄関の移築復原に関わった関係者による記録。

\* 早稲田大学 創造理工学研究科修士課程

\*\* 早稲田大学創造理工学研究科・助手

\*\*\* 工学院大学建築学部 准教授・博士(工学)

\*\*\*\* 工学院大学工学研究科建築学専攻・修士課程

\*\*\*\*\* 早稲田大学名誉教授、博物館明治村館長

\*Graduate Student, Faculty of Eng., Waseda Univ. \*\*Research Assoc, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ. \*\*\*Assoc Prof., Faculty of Architecture, Kogakuin Univ, Dr. Eng. \*\*\*\*Graduate Student, Faculty of Eng., Kogakuin Univ. \*\*\*\*\*Professor Emeritus, Waseda University. Director, The Museum Meiji-Mura